



撮影・佐々木紀明

児童ポルノ撲滅を目指す警察官僚出身の弁護士

顔

後藤 啓二さん 50

験がある。

警察庁でインターネット犯罪対策に取り組んでいた1998年。フランスで開かれた国際刑事警察機構（ICPO）の会議で、司会者から「あの児童ポルノ大国から一人でやつて来た勇敢な人物」と皮肉たっぷりに紹介された。当時、日本には児童ポルノを規制する法律がなく、目を覆うような画像が世界中に流出していた。「申し訳ない」。各国の捜査関係者らに、頭を下げるのが精いっぱいだった。

翌年施行の児童買春・児童ポルノ禁止法も規制が不十分とい。（社会部 富所浩介）

忘れられない体

に思えた。被写体の子は一生、心の傷が癒えない。「日本はなぜこれほど子どもたちの痛みに鈍感なのか」。2005

年、警察組織飛び出した司法試験に受かったのは在職中の92年。「法律に精通したかった」。通勤時や休日に法律書と向き合った。33歳。4度目の挑戦での合格だった。

弁護士に転身後は、児童ポルノの単純所持の禁止などを求め、国会議員への陳情に飛び回った。3月末には約10人の弁護士グループも結成した。「児童ポルノは児童虐待そのもの」。信念は変わらない。